○鞭柳（むちやなぎ）

境唐松神社の裏手にあたつて落柳とよばれる所がある。昔は柳の古樹があつたといい、菅江真澄は、その著「関のかり柴の巻」に鞭柳を誤つてそうよんだのではないかといつている。村人は、昔八幡太郎義家公が、この地を通過せる時手にした鞭をここにさしていつたが、その木が大きくなつたもので、逆木の柳だといつている。

（境）